

少子・高齢化が進み、人口減少社会が到来しつつあります。

これまでの郊外拡張から最近では、中心街回帰によるコンパクトな街づくりが注目されています。

全国的に、大型店の郊外展開により、中心街の小売店は、閉店が目立つようにならざるを得ません。

土岐市の駅前商店街も空き店舗が目立ち、シャッター通りと揶揄されるほどであります。

しかし、都市の顔としての中心市街地の再生と活性化は、今後とも、大きな政策課題であると存じております。

国においても、中心市街地再生のため、街づくり三法といわれる、都市計画法・中心市街地活性化法・大規模小売店舗立地法の見直し

を進めようとしておられます。その目指す方向は、中心市街地のにぎわいを取り戻すため、集約型都市構造（コンパクト・シティー）を構築しようというものであります。

現在、日本の都市の多くは中心市街地に中高層建物と老朽木造住宅が密集混在し、環境や防災上で問題があるばかりでなく、利用されていない土地や空き家が散在し、無駄の多い姿になっております。



こうした状況を改善するため、歩いて暮らせる街づくりを目指し、種々の都市機能が比較的狭い範囲で高密度に詰まり、職住接近や建物と土地の複合利用などを進めて、商業活動を活性化し、地域の活性化を図ろうというものであります。

顧みて、土岐市駅周辺は、保健・医療（開業医）・福祉・ショッピングなどの集積度が

高く、”シルバー・タウン”の条件が整っており、徒歩による移動がしやすい集約型都市構造（コンパクト・シティー）の基盤はできていると存じます。

これらの条件を生かすには、どうしたらよいかを考えたいと存じます。翻って、多年浸水被害に悩まされた土岐川も、復讐事業により抜本的な改修が完成し、安全な川となりました

コンパクト・シティーということ

歩いて暮らせる集約型街づくり

土岐市長 塚本保夫

が、この事業と連携して、都市計画街路「新土岐津線」も、土岐川改修と関連する部分約三〇〇mが、立派な街路としてよみがえりつつあります。新土岐津線は、幅員十六mの都市街路として、両側に三・五mの歩道を設置し、自転車と歩行者が安全に通行できるようにするとともに、車道の両側に停車帯を設けることになっており、用事で車道脇に

自動車を停車させても、他の自動車の通行には支障がないということであり、大変便利な道路となります。

これを土岐市駅前まで整備することは大事業であります。が、県議会議員さんのご協力をいただきながら県に要請し、ぜひとも、この事業を完遂し、中心市街地の再生活性化を図りたいと念願しております。

そこで、現在、具体的に取り組んでおりますのは、「新

市政全般を考える中で、ライフ・ラインであります上水道は、全市給水体制が完成し、公共下水道も東濃でトップレベルになりました。

市の第五次総合計画策定のための市民アンケートでは、中心市街地の活性化を求める声が多く寄せられ、高い関心が示されました。

住みやすい住宅政策、公共施設配置計画、交通安全対策など、中心市街地再生計画を通して、商店街活性化に繋がるよう鋭意研究努力し、実現を図ってまいります。

そして、それが土岐市駅周辺地区全体に波及することを願ってやみません。

人口減少という時代の転換期にあつて、地権者をはじめ、関係各位のご理解ご協力を賜り、市民各位の総意で、この事業を推進したいと存じますので、よろしくお願いいたします。

あります。